## 伊吹山の自然に魅せられて。 愛らしさが使う人に寄り添うガラス器をデザインしたい。

滋賀の北部にそびえる霊峰「伊吹山」。その麓に位置する米原に切り絵作家の早川鉄兵さんは暮らしています。里山に住む動物たちを モチーフに独自のタッチの切り絵で表現し、その時代を超越したかのような作品はモンベルのTシャツ、滋賀銀行のポスター、日産のカレンダーにも起用され益々活躍が期待されています。

株式会社黒壁とのコラボレーションでは、早川さんがデザインされた動物や自然をシンプルなガラス素地にサンドブラストで表現する ことを目指しています。万人に愛用して頂ける飽きのこないデザインで、滋賀の魅力が日常の暮らしに寄り添う価値を提供できればと思います。

今回は、デザインするにあたり早川さん自身の「暮らしと制作」に対する思いを伺いました。

聞き手/株式会社黒壁 広報担当 北村 馨

- 北村 まず早川さん自身について質問します。切り絵作家になったきっかけについて教えて下さい。
- 早川 子どものころに母親と切り紙遊びをしていたことがきっかけで切り絵を始めるんですけど、作家としては米原に7年前くらいに移住してからですね。
- 北村 米原に移住されたのは何か理由があったんですか?
- 早川 全部話すと長くなっちゃうので簡単に言いますと、僕もともと出身が石川県の金沢市なんですけど、高校卒業してから大阪に進学し、それから10年くらい大阪にいたんですね。大阪も嫌いじゃなかったんですけど、ずっと住むという感覚がなくて。たまたま仕事の関係で訪れたのが米原で、すごくいいところだなと思っていました。そのお仕事が米原市のお仕事だったんですけど、その担当の方と冗談半分でこんなところに住みたいんですよねという話をしていたら、ちょうど翌年から「地域おこし協力体制度」で人を入れようと思っているのでエントリーしてみないかというようなことを言われて来ました。



その時は切り絵作家でもなくてカメラマンをやっていたのですが、たまたま友人達と企画した「伊吹の天窓」というイベントで切り絵を展示してほしいということを言われて、それをきっかけにだんだん仕事をいただいたり、いろんなところで展示してほしいという声をかけていただいたりして、気が付くと切り絵作家になっていたという感じです。

- 北村 イベントで切り絵を展示したというのは、趣味とかでずっと続けておられたのですか?
- 早川 趣味というほどでもないですけど、もともと切り絵を小さいころからやっていたので。良くないのかもしれないですけど、人としゃべってる時に手癖のように紙とハサミがあったら何かを切ったりしてたんですよ。それをたまたま知り合いが見て、「あ、すごいね」ということで、そういうことをやって欲しいということになって、イベントに向けて切り絵をたくさん切って展示をしました。
- 北村 早川さん自身の切り絵の作風ですとか、持ち味について教えて下さい。
- 早川 作風は基本的に自然とか動物をテーマにすることが多くて、米原市の山奥に住んでいるので、普段自分が目にするようなシカとか、 ウサギとか、キツネとか、クマとか、イノシシとかいろんな動物がいて、そういう身近な日本にいる動物っていうのが一番のベースにあって、普段はそれをテーマに切っています。
- 北村 身近に見かけるということですけど、そんなにしょっちゅういるものですか?
- 早川 しょっちゅういます。人より動物の方が多いところなので。昨日も猿の群れが来ていました。そういう意味でも今住んいでるところと 自分の仕事がすごくリンクしていて、気持ちよく仕事をさせていただいているなというのは感じます。長浜も一緒だと思いますが、 環境が良いので、湖北、米原にいるからこそ作れるのかなというのは感じますね。



- 北村 先ほどと重なるかもしれませんが、伊吹山への想いというのはどんな感じですか?
- 早川 伊吹山自体というよりは、伊吹山を含めたあの辺の環境ですね。もちろん 琵琶湖も入ってくると思います。伊吹山という山自体は象徴的で神々しい と思うんですけど、伊吹山を含めたそこの生態系ですよね。この辺までく れば白鳥も飛んでくるし、伊吹山にはイヌワシがいて、クマがいて、シカがいて、キツネがいてっていう。動物だけでなく植物にも伊吹の独特の植物 もあります。その辺を含めた生態系が残っているというのがすごく魅力的ですね。
- 北村 周りの自然も含めてということですよね。
- 早川 そうですね。水も雪も含めて。雪もね、悪いこと、しんどいこと、良いこともありますよ。雪があるからこそそこの自然が保たれているなというのはすごく感じます。その辺全部ひっくるめてシンプルに大好きですね。
- 北村 この事業以外で早川さんと他の作家さんや企業と連携したことはありますか?
- 早川 いっぱいあります。今回みたいに誰かと一緒に物を作っていくということが好きなので。基本的にはそういうスタンスでいろいろなクライアントさんとか、いろいろな方と関わりながら作っていくことの方が多いです。モンベルさんとTシャツを作ったり、一昨年は日産自動車さんのカレンダーをやらせていただいたり。昨年東京にできた「ここ滋賀」の冊子とかも一緒にやらせていただいています。基本的にはそういう仕事が9割という感じです。使ってもらえないと意味がないと思うし、使ってもらえてちゃんとその中にいろんなメッセージが込められるようなものを心掛けて作っています。

- 北村 今回切り絵の絵でガラスの模様を作っていただくのですが、この事業をどういったものにしていきたいと思っておられますか。
- 早川 僕自身は紙を切るしかできないので、それがグラスになるとか、その過程で僕とは違う職人さんの手によって違うものに変わっていくっていう部分で僕自身もすごく楽しみです。切り絵は結局紙でしかないのでそれが立体になったり、ガラスなので透けたりすることが面白いのではないかという部分と、切り絵とガラス、どっちも繊細な物なのでその相性が良いんじゃないか。サンプルを何回か見せていただいている中ではものすごく良いものができる予感があります。それと、こうやって湖北で地元の作家と地元の工芸が一緒になって何かを作って発信していくところの面白さ、強さを見せつけていきたいなと思いますね。
- 北村 今の段階で、グラスに描いていきたい動物や植物で決まったものはありますか?



- 早川 僕はクマが好きなので、クマを描きたいっていうのはもちろんあるんだけど、単体で何がというよりも滋賀県の湖北の自然の美しさとか、魅力とか、そういったものが伝わるものになるといいなと思います。堅苦しいものじゃなくて、シンプルなものとしてお客さんが欲しいと思うとか、可愛いなと思うものを作りたいなと思います。僕自身この地域がすごく好きなので、その中に湖北の魅力というか自然の美しさとかをちゃんと盛り込んで伝えられるものになるといいなと思います。
- 北村 例えば食器に早川さんの絵柄がのるとしたら、早川さん自身の理想のイメージはありますか?
- 早川 僕自身もけっこう食器とか好きなので、やっぱりまず単純にお客さんが欲しいと思ってもらえるものを作れることが一番だと思います。単純にかわいいものを作りたいなと。その中で僕が魅力を感じているこの地域の自然であったりだとか動物であったりだとかをちゃんと盛り込んで、どこかで伝わるものができるといいなと思っています。
- 北村 食器とかになると例えば軽いとか、壊れにくかったり、熱に強かったりとかそういう機能が メリットとして重宝がられるというのがあるのですが、今回伊吹山の自然に生きる動物たち の生き生きとした姿がグラスに描かれることによって使いながらそれらが頭に浮かぶと いうことですよね。
- 早川 黒壁のこのエリアって観光で来られる人がすごく多いと思うので、その方が買って帰った時に湖北を連れて帰ってもらうようなことができるとすごく素敵だなと思います。大切に、長く使っていただいても飽きが来ないような自然のモチーフだとか動物のモチーフというのはそういう力があるのかなとは思いますね。ただグラスだけをお土産として持って帰るとかではなくて、やっぱりそこのストーリーを一緒に持って帰ってもらうことによって、買われた方はその時に見た自然とかを使う時に思い返して頂くことでより豊かな暮らしができるかと思いますし、僕らとしてもその魅力を誰かに持って帰って頂けるというメリットがあるのかなと。
- 北村 世代や時代を超えるようなものが最後ず一っと残るんだろなということを考えると、早川さんの切り絵には、どの時代にも左右されない、極力シンプルにものの特性だけを、しかも白黒で表わしておられるというところが特徴です。だから多分いろいろなものとのコラボレーションが可能になってくるのだと思います。例えば10年後とか30年後でも、モダンなガラスに入れても、トラッドなデザインのグラスとか食器に入れても多分合うと思うんです。明治、大正の時代のみならず江戸時代にプレスされたガラス皿とか、そういうものに絵柄が入っていても、多分オッケー。そういう、非常に広い範囲とか大衆性というのが魅力であり、キーワードになるかなと思います。
- 早川 今お話をしていて本当に思ったんですけど、イベントや広告は一定期間使うといったものがわりと多いので、そこに一点に集中して予算もかけていろんな力がかかってバンと打ち出すというのもすごくおもしろみがあるんですけど、今こうやってお話してると今回この黒壁さんで作ったグラスというのは、誰かが買って帰った時に10年後、20年後もその家の食器棚にあるのかなと思うとすごく貴重なお仕事をさせていただいてるなという重みを感じます。
- 北村 単に消費される物ではないということですね。商品のあり方 を考えさせられますよね。
- 早川 僕自身も実家に帰ったりすると小さい頃に使っていた食器 なんかが食器棚からでてくるとその当時のことがふと思いおこされるので、そういう存在のものができると僕自身すごくうれしいと思いますね。
- 北村 ぜひそういう位置づけにしたいですね。そういうふうにしていくには一緒にお仕事をする他の業界の方に加え、それをちゃんと伝えられるようなプロモーション、販売、接客をしていかないといけないと思うので、そこらへんは何か統一したテーマが欲しいですね。100年デザイン!?とか100年後でも大丈夫みたいな。
- 早川 この動物たちは、100年後もこの辺にはいると思います。むしろ僕の住んでいるあたりでは増えてるかもしれないですね。飽きてぽいっとされるグラスではなく、どうしてもあのグラスじゃないと嫌っていうものをつくりたい。また長浜に買いに来ていただけるようにね。
- 北村 よろしくお願いします。

(つづく)